

第4セッション「少数民族研究における藏彝走廊の位置づけ」

報告

藏彝走廊のチベット族と漢族

◆松岡正子氏報告に対するコメント◆

長谷川 清

＜文教大学＞

費孝通が1980年代の初めに提起した「藏彝走廊」はチベット高原の東南部から四川、雲南省西部の河川・峡谷、高原地帯を指し、チャン、プミ、イなどのチベット・ビルマ語系の民族集団の生活圏の交錯や重なりによって編成された、中国周縁部のマルチエスニックなフロンティア空間と捉えることができる。そこにおける多様なエスニック集団の支配／従属、あるいは相互依存の関係は、この地域に暮らすエスニック集団の文化形成において重要な因子となってきた。したがって、こうした特徴をもつ地域の社会・文化研究には、当該エスニック集団の内部的な状況のみならず、その集団が関わってきた外部的な諸要素の併存状態の解明が課題であり、そうした分析視点からの検討はマイクロ研究においても、マクロ研究においても有益である。松岡報告はチャン族の新年「ヲシ」儀礼とその変容にかかわる問題を事例として扱いつつ、中華帝国のもとにあったマルチエスニックな地域や個別の民族集団が国民国家を構成する要素として再編されていく場合の問題点を明らかにしており、中国周縁部に居住する他の少数民族の文化動態を検討する際の有効な分析視角を呈示している。

中国南西部のフロンティア空間やそこに暮らす諸集団が歴史学や地理学、人類学、民族学などの研究対象としてまなざされ、フィールド調査が本格化するのは中華民国期以降である。例えば、雲南省では中国・ビルマ境界地域が上述のようなユニークな地理的な特性を有するマルチエスニックなフロンティア空間であるが、中国人研究者による調査研究は1930年代に着手された。その結果、いくつかの民族誌が残されたが、この時期の調査資料は中華人民共和国成立後に進行した「社会主義改造」以前の状況を記述しており、それらの資料を今日の少数民族の状況と比較対照することは、エスニック集団の社会・文化変容の研究において不可欠な作業である。この点は「藏彝走廊」と呼ばれる地域の諸集団においてもおそらく同様であり、漢族文化の受容の歴史過程について様々な民族誌的事実が発見できるのではないかと思う。中華民国期は「中華民族」概念が普及しはじめる時期に当たっており、マルチエスニックなフロンティア空間が国家支配のなかにより実質的な意味において組み入れられていく。時間と空間の両面において再編化が進行し、重層的な構造が支配的となっていくのではないだろうか。また、空間の結節点としての交易拠点や廟の分布、あるいは政治的な拠点としての土司などが漢族文化の受容において果たした歴史的意義を検討する必要もあろう。

漢族の年中行事や暦法の受容に関して、徳宏地域のタイ族（タイ・ヌーと自称する）の場合、上座仏教に基づく暦法と漢族の農曆の併存が認められる。ポイと呼ばれる宗教実践は仏教儀礼としてタイ族の間で重視されているが、徳宏地域のタイ族は漢族の年中行事の影響を受ける一

方、春節をポイ・ルンシー（タイ暦 4 月 15 日に行う）と呼んで祝った。こうした現象は民国期に進行したとされている。清明節も一部の地域で行われるが、これは、1930 年代後半の雲南・ビルマルートの開通以後、漢族が進出してきたことにともない、普及した。また、土司階層も漢族文化の受容に積極的であった。漢族文化の受容や普及に、土司という中間的な権力主体が介在した。中国周縁部のマルチエスニック地域における諸民族のフローについては、南北の方向（伝承レベルにおける移住経路も含めて）と東西の方向では、その移住についての語りや歴史の表象も異なっている。「藏彝走廊」の諸集団にはどのような特徴が見いだせるであろうか。